

「道」が表すもの

花巻南高等学校 三年 那須野 愛梨

「僕の前に道はない、僕のうしろに道はできる」という高村光太郎の書いた詩がある。小学生の頃、テレビから聞こえてきたこの詩について私は単純に「カッコいいな」と思った。道なき道を勇敢に突き進んでいるような感じがしてとても印象的だった。

高校生になって多くの文学作品を学んでいくなかで高村光太郎の作品に触れる機会があった。多彩な表現と細かい心情描写に惹かれ他の作品にも興味をもった。そこでこの詩が『道程』という詩の一部だと言うことを知った。詩について調べてみると、ただ単純にかっこいいとかそういうことではなくゴールのない人生と自分が歩んできた道のりについて語った深い詩だった。

高村光太郎はこの詩の中で「道」を人生とした。本で調べてみても「道」という言葉に人生という意味はない。しかし、私達はこの詩の「道」が人生を表していると言われれば納得しこれ以上に人生ついて上手く表現した言葉はないだろうと思う。不思議ことに私達は目に見えていなくても目標にたどり着くまでの過程を「道」と表現する。例えば、学問・武芸の達人を「その道を極めた人」と言ったり、道理に反したことを「道からはずれる」や「道をあやまる」と言ったりする。これらの表現は全て違う意味になるが、私はこの目に見えない「道」を共通の意味にも置き換えることができると考えた。それは努力だ。人生にしても修業にしても努力することは必要だ。努力も目に見えないが、その過程を「道」として自分の中で可視化していくことで自分自身の自信につながり外面にも表れてくるのだと思う。そして、その「道」が外に広がることで相手から努力が認められるということになるのだ。

また、「道」には過去の努力と未来の努力の二つがある。先程までの話のように後ろに造られていく道が過去の努力だ。そして、自分がこれから造ろうとしている道は未来の努力だ。私はたびたび、「自分が選んだ道」ということについて頭の中で議論する。高校受験で志望校を親に反対され、流されるように入った今の学校で「辛いな」「自分が選んだわけじゃないのに」と何度も思った。そのたびに「すべての道はローマに通ず」という言葉を思い出した。意味は目的にたどり着くための手段は沢山あるということだ。この言葉から、自分が選んだこの道は沢山ある手段のうちの一つにすぎないと考えるようになった。今では高校での努力も過去の努力となりつつあり、人を救う仕事に就くという目的の布石となっている。「道」は自身の努力によって造られ、後悔や感動、喜びなど感情も影響する人生そのものである。生きていく中で、自分が造った道を確認しより多く経験と努力を「道」の糧とし、ゴールまでの道のりを歩んでいきたい。

(傍線部分は原文まま)